

ナースインホーム ひまわり

症 例 概 要 利用者氏名：Y・M様（50代 女性 要介護1）
利用期間：令和 2年7月 ～ 現在に至る
基本情報：夫と2人暮らし
疾患：大脳皮質基底核変性症、アルツハイマー型認知症

経過：平成31年4月頃から、両手の動き（特に右手）が悪くなり、また不眠症状を併発、市内K病院受診し、うつ病と診断。令和元年11月～令和2年2月まで入院されたが、退院後にADL低下が見られ、食事・着替え・入浴等すべての面で介助が必要となり、同年4月、N病院に入院され、上記の診断名で薬剤調整を行い、ADLや精神症状も改善。退院に向けて、同病院の連携室より、看護小規模多機能のサービスが合うのでは?と相談され、利用に至ったケース。

内 容

Yさんと同居されているご主人はS市勤務の為、早朝から夜までご本人が自宅で一人で過ごすことに不安を感じていらっしゃいました。そのため、朝の迎え時間を8時、夕方の送り時間を18時とし、朝・昼・夕3食をナースインで提供することにしました。加えて訪問時の玄関の施錠は、スタッフがを行い、鍵はご本人が管理し、季節に応じたエアコンのタイマー設定の変更等もスタッフが行うことにし、まずはご自宅での生活を中心に、Yさん、ご主人にも安心して生活を提供できる体制を構築するプランを作成しました。

令和2年7月からご主人が休みの日以外は、上記の支援内容で利用開始となりました。

開始当初は、表情も硬く、おどおどされており、新しい環境に戸惑っている様子でした。食事の際、茶わんや箸をうまく持てない様子も見られたため、ご本人とご主人、ひまわり訪問看護ステーションの作業療法士を交え、カンファレンスを実施。以前と同じ使用感を感じられる、軽くて持ちやすい食器具を使って頂くことにしました。

また主婦の感覚を取り戻していただくため、食後の食器の片付けや洗い物、洗濯物たたみを生活リハビリとして導入しました。軽い食器やたたみやすいハンドタオルのようなものから始め、徐々に重いものや大きいものにしていき、ガラスや瀬戸物の食器、バスタオルやシーツなどもたためるようになりました。また週1回、作業療法士の介入を依頼し、上肢の可動域訓練と屋外の散歩を30～40分継続しました。

元々性格が穏やかで、聞き上手な性格が功を奏し、他の利用者さんとのコミュニケーションもスムーズにでき、加えて生活訓練、可動域訓練による成功体験の蓄積が、ご本人の笑顔を少しずつ取り戻していくきっかけになりました。

利用開始から約4か月経ち、表情も穏やかになり、箸の使い方も違和感なく、こぼすこともめっきり少なくなりました。看護小規模多機能のサービスやひまわり訪問看護ステーションの作業療法士の支援を受け、徐々にもととの生活を取り戻せたとのことで、ご主人も安心して仕事ができると感謝の言葉をいただきました。

今後も、看護小規模多機能の特性を活かしつつ、様々な職種で一人の利用者さんに寄り添えるという強みを発揮し続け、地域でNo. 1に選ばれる看護小規模多機能施設を目指したいと思います。